留学報告書
～Do What Excites～

コー大学
外国語学部（長期）

私はアメリカ・アイオワ州にあるコー大学に長期交換留学生として約９ヶ月間留学していました。私がこの留学を決めた理由は、単なる語学力の向上だけでなく、自分のキャリアや将来のあり方を見つめ直したいという強い想いがあったからです。日本という慣れ親しんだ環境から離れ、改めて異国の地で生活することを通して、自分自身の価値観や、今後どのような人生を歩んでいきたいのかを明確にしたいと考えました。実際にコー大学での生活は、留学前に想定していた以上の困難や驚きの連続でした。慣れない言語での専門的な議論や、予期せぬ生活トラブルなど、日々が挑戦の連続でした。しかし、そうした予想外の出来事の一つひとつが、私に新たな視点を与えてくれました。本報告書では、私が経験したコー大学での学びや思い出、現地での生活を通じて直面した苦労、そしてそれらを乗り越える過程で得たかけがえのない気づきについて報告します。この留学が私にとってどのような意味を持ち、今後の人生にどうつながっているのか、そのすべてをこの報告書にまとめました。

留学生活のスタート時、私はどうしても不安が先に立ち、留学生専用の授業を中心に履修していました。しかし、せっかくここまで来たのだから、もっと現地の学生と関わりたいと思い、二学期目からは現地の学生が中心となる授業へ積極的に挑戦することにしました。その一つがソシオロジー（社会学）の授業です。現地の学生たちと共に取り組んだグループワークでは、言語の壁や文化的背景の違いに何度も戸惑いました。しかし、自分の意見を論理的に伝える努力を重ねた結果、最終的にはクラス内投票で自分たちの発表が高く評価され、最優秀作に選ばれるという素晴らしい結果を残すことができました。この経験は、「言葉が完璧でなくても、想いを伝えようとすれば必ず通じる」という大きな自信へと繋がりました。もう一つの挑戦としてのアートクラスでは、毎回作品を作り終えるたびに、学生同士で発表し合い、互いに評価し合うプロセスが待っていました。日常会話とは異なる「作品を通して自分の意図を表現する英語」には非常に苦戦し、言葉選びに頭を抱える毎日でした。しかし、その苦しさから逃げずに表現の仕方を検索したり、実際に現地の学生に聞いてみたり、発表と評価を繰り返したことで、以前よりもずっと自由に、自分の思いを形にできるようになりました。一学期目の守りの姿勢から、二学期目には現地の環境に飛び込み、自分なりに試行錯誤を繰り返すことで乗り越えることができました。このプロセスのすべてが、私にとって何にも代えがたい成功体験と自信になっています。

留学生活における「生活面」は、学業以上に私を大きく成長させてくれる場でした。寮

生活ではシャワーの配管トラブルが日常茶飯事でしたが、中でも忘れられないのがエレベーターに閉じ込められたときのことです。突然止まったエレベーターの中に、私と知らない学生が二人きりで取り残されてしまいました。なかなか外と連絡が取れないというピンチの中で、その学生は焦るどころか、その状況を面白がっていたのです。余裕を失わず「楽しむ」というその姿勢に、驚かされました。どんな状況でもポジティブに捉えることの重要性を、私はこの予期せぬ出会いから学びました。もちろん、ほかにもリフレッシュする機会にも恵まれていました。学内で開催されたビンゴ大会やインターナショナルバンケットでは、世界各国の料理を囲み、それぞれの国の文化について語り合いました。こうした時間は、勉強だけでは絶対に得られない生きた文化理解の場となりました。また、現地では大学という枠を超え、実に多様な人々と出会うことができました。コーヒーショップの常連客やイベントでたまたま知り合った方々など、大学外で築いた関係性は、私の世界をより立体的で彩り豊かなものにしてくれました。特に、旅行を通じて得た経験は一生の宝物です。シカゴでは、大都会の圧倒的な高層ビルの景観や NBA の試合観戦を通じて、アメリカという国の持つエネルギーを肌で感じました。そして、ニューヨークへの旅行。ここは、私にとって子供の頃からの夢の場所でした。20 代のうちにこの街に立つという目標を、留学という形で実現できたことは、言葉にできないほどの感動でした。この地で感じた空気感は、これから社会人として困難にぶつかった時、私が頑張り続けるための大きな原動力になると確信しています。また、イースターには現地の家庭に招かれ、家族行事を共にさせていただきました。異なるバックグラウンドを持つ人々と食卓を囲み、同じ時間を共有することで、相手の文化を尊重しつつ、同時に自分の意見もしっかり持つことの大切さを学びました。ハイキングやゴルフを通じて友人たちと他愛のない会話を重ねた時間も同様です。こうした日々の積み重ねが、閉鎖的だった私の視野を大きく広げ、多様な価値観を当たり前に受け入れられるオープンマインドへと変えてくれました。

この 9 ヶ月間の留学を通して私が最も成長したと感じるのは、「正解のない問い」に対して自分なりの答えを出し、行動に移す力です。日本での学生生活では、どこかに「模範解答」があるような安心感の中で学んでいたように思います。しかし、コー大学での学びや生活は、常に予期せぬトラブルや多様な意見のぶつかり合いの連続でした。エレベーターに閉じ込められた体験のように、状況は常にコントロールできないものだと知りました。しかし、その状況をどう捉え、どう行動するかという心だけは自分自身で決めるものだと確信しました。この「どんな状況でも自分を律し、楽しむ姿勢」は、社会人としてどのような困難に直面しても、私を支える強固な武器になると信じています。また、この留学生活で私が痛感したのは、「行動しないこと」こそが人生における最大のリスクであるということです。多くの人は、たとえ現状に満足していなくても、あらかじめ敷かれたレールの上を歩くことに安住してしまいます。しかし、異国の地でゼロから人間関係を築き、トラブルを乗り越え、夢であったニューヨークの街に立ったとき、私は「自分の意志で行動し、好きなことを追求する」ことの意味と輝きを知りました。現状に留まってリス

クを避けるのは簡単ですが、それではあまりにももったいないし、つまらない。世界にはまだ見ぬ文化があり、多様な人々がいて、私がまだ知らない感動が溢れています。この留学を経て、私は「人生を心から楽しむ」ことの意味を学びました。人を、文化を、世界を知るためには、まず自分から一歩を踏み出す事が重要です。帰国した今、就職活動という現実に直面し、焦りを感じないと言えば嘘になります。しかし、今の私には留学中に培った揺るぎない自信があります。それは「自分自身の好きという気持ちに正直でいよう」という確信です。周囲のペースに惑わされるのではなく、自分が心から情熱を注げる対象を追い求める。そんな生き方を貫こうと決めています。泥臭く試行錯誤し、困難をポジティブに捉え、自ら道を切り拓いたこの９ヶ月の経験は、これからの人生でどのような壁にぶつかっても、私を支え続けてくれるはずです。

最後に、この留学を実現するために支えてくださった大学関係者の皆様、家族、そして現地で私を支えてくれたすべての人に心から感謝を申し上げます。皆様のサポートがなければ、私はこれほどまでに広い世界を見ることができませんでした。留学はここで終わりではなく、私の人生における新たなスタートです。この９ヶ月で得た「行動する勇気」を糧に、これからは日本、そして世界という舞台で、私らしく、心から楽しめる未来を切り拓いていきます。











